

平成 25 年度教職大学院派遣研修研究報告書

派遣者番号	25K18	氏 名	柴崎 大輔
研究主題 —副主題—	相互尊重を基本とした若手教員育成システムの構築 —算数科におけるルーブリックを活用した授業作りと打合せの工夫を通して—		
所属校	八丈町立三根小学校	派遣先	東京学芸大学教職大学院

項 目	内 容
I 研究の目的	現在の初任者教員は、即戦力として必要とされ、就任直後から一定の指導力を期待されてしまう。その為、若手指導担当者も早期の若手育成を求められることになり、若手教員への「具体的な指導」や「明確な課題の指摘」をせざるを得ない状態になる。しかし、若手教員へ「具体的な指導」や「明確な課題の指摘」を行うことは、若手教員自らが学んでいく姿勢を阻む可能性がある。さらに、「指導」や「指摘」を受け、若手教員自身の課題や欠点を明確にされることが山積していくことで、若手教員は自信を失い、課題に対し主体的に取り組むことができなくなることがある。 このような関わりが続くと若手教員は委縮し、ささいな相談をすることもできなくなってしまう。そのため、型のない若手教員が自分の指導法を誤りと認識した時、子供と向き合うことが困難となり、最悪の場合、子供の前に立つことはできなくなることがある。このことは、現状として、平成 24 年度全国の条件附採用者の依願退職者は 348 名に上ることからも明らかである。 そこで本研究では、指導担当者の「相互尊重を基本とした若手教員の育成」モデルの開発を目的とした。
II 研究の方法	若手教員が主体的な授業改善に取り組むためには、教員同士が相互に尊重した授業協議の場が必要であると考えた。 そこで、研究仮説を「目指す児童像の共有化と自身の授業課題の明確化の取組を含んだ算数少人数システムを構築すれば、若手教員は主体的な授業改善に取り組むことができるであろう。」と設定し、研究に取り組んだ。 若手教員とベテラン教員が相互に尊重する場を構築し、互いの授業力を向上させるために、学級担任と算数少人数担当の複数教員で連携を図り、複数クラスが学習進度を揃えて授業を同時に展開する算数少人数制度を活用し、教師の授業力向上のためのシステムを三つの取組を柱として授業実践を通じた研究を行った。 1) 少人数加配＋1 指導体制を構築 算数少人数加配指導体制に、更に教員を 1 名を増員した指導体制をとる。そのことによって、1 クラスでチームティーチング体制をとることを可能にし、増員分の教員が、チームティーチング担当者として指導するとともに、必要に応じて他の授業展開も参観する。 2) 目指す児童像の共有化 授業ごとのねらいを明確にした授業作りを行えるよう、授業前にルーブリック評価表の作成を協働で取り組む。 3) 授業課題を明確化 複数教員が取り組む算数少人数指導で行われている打合せを工夫する。短い時間で担任と算数少人数担当との打合せの充実を図り、効果的な指導を実施するために、必要最低限の共通理解を明確にすることとともに、毎授業後に授業協議会を取り入れることで、各自の授業課題を明確にする機会をつくる。

Ⅲ 研究の結果	1) 少人数加配＋1 指導体制を構築 T 2 による授業参観により、同じねらいで構成されている授業展開を同時に複数参観することができた。さらに、ベテラン教員や若手指導担当教員も共に授業を進めることで、授業づくりや指導の工夫、改善の手だてなどを一緒に取り組むことができた。その結果、お互いに同じ立場の教員として授業改善の意見交換をするなど、指導者側の意識を「指導」や「指摘」から「協働」へ変えることができた。また、学年主任は、若手教員の授業観察や学年の児童の様子を把握することができた。 2) 目指す児童像の共有化 授業前に目指す児童像を共有することで、授業を通した児童の姿が明確になり、授業のねらいを達成するための授業づくりを若手教員自らが考え、実践することができた。また、ルーブリックを活用した段階的な評価項目を作成することで、ベテラン教員が経験の中で得た児童の学習理解の過程を明確にし、児童の理解の様子を確認しながら学習を進めていく方法を若手教員が学ぶ機会をつくることができた。 3) 授業課題を明確化 毎授業後に短縮授業協議を行うことで、自身で明確にした課題についてのアドバイスを受けることができた。また、同じねらいで実際に行った他の授業と比較し、情報交換を行うこともできた。さらに、提案された授業課題をきっかけに話題が広がり、ちょっとした悩みや質問などの情報交換を気軽に行うことができた。
Ⅳ 考察	授業実践後の研究対象者からは、「短時間の打合せを設定することで、本時の授業をその日のうちに振り返ることができた。」、「授業の課題を考えたり、相談したりすることができた。」、「各教員で共有したねらいから、児童にどのような見通しを伝えたのか確認し、授業展開の広がりを知ることができた。」という感想があった。 このことから、「少人数加配＋1 指導体制を土台とし、目指す児童像の共有化と授業課題の明確化を日々行うことで、若手教員が自ら授業づくりに取り組み、自身の悩みや課題を相談することができるようになる。」ことが分かった。 若手教員を指導する際は、まず、若手教員が安心して授業改善に取り組むことができる指導者側の相互尊重の意識が重要となる。そのために、指導担当者も気負うことなく、学校全体で取り組む若手教員の育成システムが必要となる。ベテラン教員と若手教員が相互に尊重し、授業改善に取り組むことで、若手教員が安心して成長していく意識を学校全体でもつことが大切となる。